

1:

『チンチンの実』

この悪魔の実を食べた男は性行為がうまくなり、男根が性行為しようとしている女性の好みの形、性質に変形し極上の快楽を与えるものとなる。

さらに精液には老化防止の作用や、生臭い匂いには興奮させるフェロモンも混ざっており、まさしくセックスするための男となることができる。

そして一度膣内に射精した女性の元に瞬時に移動することもできるようになるため、いつでもお気に入りの女に会いに行くことが可能なのだ。

(まず初めはどの女性がいいか……くそ……手配書を見てるだけでムラムラする……)

念願叶ってチンチンの実を手に入れた童貞の男は、早速その実を食べて気になる海賊女たちの手配書を部屋で吟味していた。

世は大海賊時代。

おのずと海賊の中にムラムラするいい女もいるような時代。

男は以前から手配書に載っている海賊女たちに興味を持っていた。

麦わら海賊団にいる『泥棒猫ナミ』や『悪魔の子ニコ・ロビン』。

『海賊女帝ボア・ハンコック』などなど。

はたまた、海賊団に限らず海軍や革命軍などにも股間を熱くさせる女はごまんという。

(くぅ～悩むな～……えーい！　とりあえず能力者全員に手紙を送っちゃえ！！)

手配書を見て、もはや全員がチンチンを挑発しているかのようなポーズを取っているように見えた男は急いで手紙を搔きはじめた。

男が手紙を書く理由。

それはもちろん目当ての女性とセックスするためなのだが、その方法というのが、悪魔の実のもう一つの副作用を利用するというものだった。

悪魔の実を食べた女性限定でごく稀に副作用として、異常な発情状態となり性感帯となっている部分が疼いてチンチンの実を食べた男の刺激を求め、たまらなくなってしまうことがあるそう。

しかもその副作用はチンチンの実を食べた男とセックスしないと止めることができない。

そして、発情状態の女性はチンチンの実を食べた男とセックスしないと抑えることができないということをも本能で感知するため、自然と他の男とはセックスするという選択肢が無くなってしまふ。

男はこの異常な性欲の副作用が出ていることを願い、もし出ているのであれば自分のところに尋ねて欲しいという手紙を書いて、能力者の女性たちに送ろうとしているのだ。

(よし、とりあえずこんな感じで……下手に下手に……どうせならラブラブエッチしたいからな……)

最終的にはラブラブエッチに持ち込みたい童貞男は、女性を変に挑発しない程度の書き方にし、手紙を完

成させ配達を頼んだ。

果たしてこの手紙を呼んだ女たちは男の元を訪ねるのだろうか……

……………

……………

……

「はあ……はあ……あなたね……例の悪魔の実を食べたのは……」

今、男の家の入り口で息を荒くさせ、壁に肩を付いて辛うじて立っている艶めかしい大人の色気を放つ女……

ニコ・ロビン。

エニエスロビーでの戦いの後、身体の発作を感じたロビンは、なんやかんやしながら男の家までたどり着き、今に至っていた。

胸元を見せた革製のミニワンピースに、黒ニーソを着用して絶対領域を晒し、ボディラインをくっきり浮かび上がらせた色気たっぷりの姿で立っている。

身長188cmもあり、エロさを強調させる零れそうなバストを息荒く震えさせ、黒ニーソとミニスカの間から見える絶対領域の太腿に薄っすらと汗を掻いており、スカート内の蒸れ具合をそこはかとなく醸し出している。

「……ゴクッ」

突然男の前に現れたムチムチの絶世美女。

本来であれば高額懸賞金が掛かっている海賊のため、恐れを抱きそうなものだが、なぜロビンがここへ来たのかはもう分かり切っているため、恐怖よりも興奮が勝っている男。

「はあ……はあ……」

艶っぽい息使いを聞き興奮を高めながら、男はロビンをベットへと誘導しようとする。

「さあ、ロビンさん。あなたがここへ来た理由はわかってます。ひとまずその副作用を抑えるためにベットに寝てください。なんなら肩を貸しましょうか？」

「んっ……自分で……歩けるわ……」

(まさか、副作用がここまでひどいなんて……とにかくまずは、この発作を抑えないと……)

男の手紙がロビンのもとに辿り着いたのと同じくらいの差で、悪魔の実の副作用が発症してしまった。

副作用の発情感はとても抑えられるものではなかったにも関わらず、一味の仲間たちでは欲情せず、手元にあった手紙の主を探し出すという考えがずっと頭の中にこべりついて離れないまま、結局男の家を訪ねることになったロビン。

こんな状態ではまともに戦力になる事が出来ないため、とりあえず発作を抑えるという目的で男と身体を重ねようとしていた。

(発作を抑えるためだけ……大丈夫……それだけよ……)

「あっ……」

「あ！？ あぶない！？」

自身の身体の余りの欲情ぶりに、何とか思考だけは正常に保とうと考えながら歩いていると、脚を踏み外して倒れそうになったロビン。

そのロビンを見て、すぐさま男は前から抱きかかえて受け止める。

「んっ！？ ……………っ♡」

前から男に抱きかかえられた瞬間、身体が触れている部分に異常なまでの熱を感じ、性的な興奮が全身を駆け巡った。

（熱い！ この男に触れられている部分が……ダメ！ このままじゃ……）

「はあ！ はあ！ はあ！ はあ！」

「大丈夫ですか？」

高身長のロビンが少し前かがみになり、身長の高い男と顔が近くなって、二人は互いにゆっくりと顔を離していきながらも、次第に見つめ合うような体勢になっていた。

「はあ……はあ……」

ドクン！！ ドクン！！ ドクン！！ ドクン！！

男の顔を真正面から間近に捉えた瞬間、鼓動が大きくなる。

そしてロビンの頭の中に男と下品にラブラブエッチしている光景がまざまざと浮かび上がり、溢れんばかりの淫らな思考が脳内を支配していく。

（チンポ……彼のチンポが……っ！？ ダメ！ 流されてはダメよ！！ これも恐らく発作とこの男の悪魔の実の能力の力！ アラサー女のチン媚び腰振りデカチンポ誘惑して、彼とラブラブ濃厚セックスしたいなんて考えてはダメ！！）

何とかして自分の頭の中に湧き上がる淫らな考えを振り払い、自我を保とうとするロビンだったが、時すでに遅く、頬を赤らめた状態の瞳を潤ませたもの欲しそうな表情で下品に舌を突き出し、キスを媚びている顔をしてベロを蠢かせながら、下半身は蟹股に足を広げつつ、腰をグラインドさせチンポに媚びる動きをし、ずり上がったスカートから黒いショーツに包まれたデカ尻が晒されてしまう。

「はあ……はあ……はあ♡」

「ゴクッ！！ ロビンさん……」

ロビンの性を媚びるような蠢きに愚息が破裂しそうなくらい大きくなった男は、興奮しながら鼻息荒く顔を近づけ、色っぽい考古学者の突き出た舌に自身の舌を絡め始めた。

「れろっ！！ れろっ！！ えろっ！！ じゅるっ！ ずちゅっ！」

唾液が滴り落ちることなどお構いなしに、二人は下品に互いの舌を求め合い、下品な音を立てて絡ませていく。

「はあっ♡ れろっ♡ くちゅ♡ ぢゅぢゅ♡ れろっ♡」

(ダメ!!　ダメなのに!!　彼の舌が……美味しい♡♡　気持ち良い♡♡　もっと……もっと彼の唾液が飲みたい♡♡)

ロビンはベ口を絡め合わせたことによって切なくなってきた下半身を卑猥にくねらせながら、蟹股中腰で男にじりじり近づき、両手で男の肩をがっちりと掴んで逃がさないようにホールドする。

自身の意志ではもうどうすることもできないくらいに性欲が高まり、どんどん目の前の男にチンポを媚びる身体にくねらせ方をしていく。

長身だが出るとこは出ている巨乳と巨尻の厭らしい身体が、自分の舌を求めてにじり寄り、がっちり腕でホールドされていることに男は興奮して、激しく互いに舌を絡め合った。

「くっちゅっ♡♡　れろっ♡　れろっ♡　れろっ♡　……はぁ……はぁ」

激しい舌の絡め合いで息も絶え絶えになっていた二人だが、ロビンが蕩けた表情で口をだらしなく開けたまま男を見つめる。

(ダメよ!!　流されてはダメ!!　これ以上は……)

何とか理性を保とうとするが、悩ましく眉毛を動かしながらも、自然と顔を近づけてしまう。

そして……

「くっちゅ♡　じゅるっ♡　れろっ♡　くちゅ♡　ぢゅるっ♡　んあっ♡♡」

舌の絡め合いだけでは飽き足らず、濃厚なディープキスを始めてしまう。

(流されるままにキス……こんな事ではダメ……でも……口を合わせてるだけなのに……なんという高揚感なのかしら♡♡)

生ぬるく汚いはずの唾液を貪るように、ロビンは男の口の中で自身の舌を這わせまくり水分という水分を根こそぎ奪っていく。

男の口の中でロビンのベ口が暴れまわっており、歯茎をなぞる様に舌先を強く這わせたかと思えば、頬の裏側までも感触を楽しむかのように這いずり回り、性欲の強い男でさえも、そのベ口の動きに合わせて自分の舌を絡め合わせることで精いっぱいだった。

「んちゅ♡　れろっ♡　くちゅ♡　ずぢゅっ♡　じゅるっ♡♡」

ディープキスで興奮しまくったのか、いつの間にかロビンの身体から、何本か腕が咲いており、さらに男をきつく抱き寄せている。

ずっとセックスしたいと思っていた憧れの存在であるニコ・ロビンから、ここまで求愛行動をとられて、されるがままの状態になっている男ではない。

男も両手を伸ばし、ロビンの尻部分のショーツに手を突っ込んで、求愛腰振りをしているデカ尻を揉みしだきだした。

もっぴゅっ!　もっぴゅっ!　もっぴゅっ!　もっぴゅっ!!

黒いセクシーなショーツの中で、卑猥に両手が蠢きまわり、淫らな行為がもっと淫らになっていく。

「ん　ん　っ!!　んっくっああ♡♡　はあっ♡　んっ♡　くちゅ♡　れろっ♡　ずぢゅっ♡♡　くちゅ

♡」

（興奮して私のデカ尻を揉みだしたわね……お尻から彼の温かい手が厭らしく尻肉を揉んでいるのが伝わってきて……ダメ！！ アナルが疼いてくる！！）

男に尻を揉みくちやにされることによってアナルが疼き始め、その疼きから逃れようとしてロビンはさらに股を広げて下品な体勢になってしまう。

クールでどこかミステリアスな雰囲気があったニコ・ロビンの蟹股求愛キスによるギャップは凄まじいもので、男の股間をどんどん熱くさせる。

もっぴゅっ！！ もっぴゅっ！！ もっぴゅっ！！

興奮の高まりで尻を揉む力も強まり、ふとした瞬間に、男の指がアナルに触れてしまった。

ずりゅっ！！

「っ！？」

「んはああああっ！？」

呼吸をしているような大きなヒクつきをしていたアナルに男の右手の人差し指が触れた瞬間、その指が瞬時に肛門に食べられてしまう。

「あっ……ああっ……あっ……あゝ あゝ っ♡♡」

肛門が指を食べた瞬間にロビンは余りの快感で口を離してしまい、涎を垂らしながら天を仰ぎ、情けないアヘ顔を晒してしまう。

（ゆ……指が！？ 私の……ケツ穴に入って！？ きっ……効くうううう♡♡♡♡）

肛門に思いもよらぬ肛撃を喰らって快感により快楽を貪るように尻を落として腰をグラインドさせはじめ、もっとアナルを穿って欲しそうに媚び始めるロビン。

「ロビンさん、アナル穿って欲しいんですね！！ いいですよ！！ 思いっきりケツイキしてください！！！」

ロビンの意図を汲み取った男は、指先に力を入れてアラサー女考古学者の肛門を穿りだした。

ぎゅにゅっ！！ らゅにゅっ！！ らゅにゅっ！！ らゅにゅっ！！

「あゝ あゝ っ♡♡♡♡ はああっ♡♡ 別に！！ 穿って！！ 欲しいわけじゃ！！ あっ♡ あゝ あゝ あゝ っ♡♡」

男が人差し指で無理やりケツ穴を拡張し、それによる刺激でロビンが悶える。

ロビンのケツ穴の締りは中々のモノで、本人も括約筋に力を込めているのか、引き締まる力と排出する力どちらともに強く、油断したら指がすっぽ抜けてしまいそうなほどだった。

（私のアナルが無理やり穿られてる！！ 彼のチンポを受け入れるくらい拡張させられてる！！）

「んゝ んゝ っ♡♡」

激しく肉液を抉る肛門穿りで全身に電撃が走っているような強烈な快感に襲われる。

指でも十分ケツ絶頂を感じてるロビンだが、頭の中では食欲に男のチンポ受け入れ態勢になっていた。

だがロビンは強靱な精神力で自身の淫乱腰振りと、直腸の肉壁を抉るような肛門指穿りで意識がぶっ飛びそうになっているところを持ちこたえ、反撃に転じる。

（このままでは完全に濃厚な恋人同士のラブラブエッチをしてしまうは……♡ アラサー処女の本気の腰振りで、彼の精子で着床するチン媚びセックス……♡ それだけは……なんとしてでも避けないと……♡）

「んぐっ♡ はむっ♡♡ くちゅ♡ じゅるっ♡ ぢゅぢゅっ♡♡」

歯を食いしばって意識を保ったロビンは、油断していた男の口にペロを突っ込み、再び濃厚なペロチューを始めたかと思えば、右手で男のズボンをまさぐり始め、勃起チンポを露出させた。

ポロンッ！！

ロビン好みのデカマラに変形してしまったチンポは怒れる亀頭でアラサー女体を睨みつけ、臨戦態勢の状態に入っている。

そんな肉棒をロビンは決死の覚悟で順手で握り、扱き始めた。

くちゅ！！ くちゅ！！ くちゅ！！ くちゅ！！

既にカウパーで全体をべちゃべちゃにしていた肉棒から、卑猥な粘膜音が響いてくる。

（ああ♡♡ なんて大きなチンポなの……♡ こんなのを喰らってしまったら……アラサー処女マンコなんて一撃で堕ちてしまう♡♡ その前に……なんとしてでも骨抜きにしないと！）

右手から伝わってくるのは、副作用の時に自分の頭で想像した理想のデカチンポの何倍も魅力的な硬さと熱さと太さを兼ね備えているもので、触れているだけでロビンの下半身は燃えるように熱くなっていた。

ロビンが肉棒を扱っている一方で、その気持ち良さにより、男の女体の肛門を穿る動きも激しさを増してくる。

「ん`ん`っ♡♡ んぐっ♡ くちゅ♡ ずちゅ♡♡ じゅぢゅ♡♡」

またしてもケツイキしてしまったロビンは涙を流しながらも意識がぶっ飛ぶのを堪え、何とか対策を講じようとする。

（彼のアナル挟りが激しくなった！！ このままでは、ケツ絶頂で果ててそのままヤラれてしまう！！ その前に……）

ロビンは男の股下から腕を咲かせ、さらに金玉も揉み解しはじめ、より強い快楽を与え始めた。

これにはさすがの男も一瞬腰が引け、下半身の震えが強くなる。

（ふふ♡♡ 悶え始めたわね♡♡ その調子よ♡♡ 私はあなたに堕ちないために……チンポに媚びるわ！！ 金玉の中にある精子を全部出させて、私が優位に立ってみせる！！）

もはや頭が混乱しているロビンは、とりあえず男を射精させようと、右手の動きを速め、ペロを絡めまくり、身体を抱き寄せた。

ロビンの激しい攻めに、肉棒の血管もドクドクと脈打ち、射精の予兆を感じさせている。

（それにしても……なんてずっしりとした金玉なのかしら♡♡ こんなずっしり金玉……どれくらい射精す

れば気が済むというの……♡♡)

男の睾丸をクニクニと優しく揉みこみながら、そのずっしりとした質量のある金玉にときめいてしまっているロビン。

肛門からの激しい刺激もあり、腰を振る動きが一層激しくなり、男の指によるアナルの攻めも強まっていく。

「ん ん っ♡♡ ちゅちゅ♡♡ れろっ♡♡ んあっ♡♡ あ ぁ ぁ っ♡♡♡♡♡♡♡♡」

(イクっ!!! 強烈なのが……来るッ!!! 駄目よ!!! 何とか持ち堪えて……彼を先に!!!!!!)

「お っ♡♡ お お お っ♡♡♡♡♡♡♡♡ お お おおおおお♡♡」

「くうううう!!!!」

互いの強烈な攻めでキスする余裕さえなくなった二人は、お互いに絶頂させようと力を振り絞る。

男は人差し指で肛門内をフックし、アナルで女体を持ち上げるように力を加え、ロビンは肉棒を持っている手の動きを極限まで速めた。

(ダメ!!! ケツが!!! 糞穴が挟られて!!!! ケツ絶頂しちゃう♡♡♡♡ ケツでイって……ケツイキで気持ち良くなるううう♡♡♡♡♡♡)

「ん ん ん っ っ っ っ っ っ っ っ っ♡♡♡♡ イッ……くううううううううう♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

頭が真っ白になりそうなくらいの快感をケツからもらい、盛大にケツイキしたとほぼ同時に、男の方の肉棒からも白濁液が勢いよく噴出される。

ドッピュウウウウ!!! ドッピュウウウウ!! ビュル!! ビュル!! ビュルルルッ!!!!

激しく噴出した精子がそのまますぐロビンの股間めがけて飛んでいき、熱々の白濁液がびちゃびちゃと黒ショーツのクロッチ部分に付着し、アラサーマンコを刺激する。

「ん ん っ♡♡ んあっ♡♡ ああっ♡♡♡♡」

(なんて熱い精子なの!!!! こんなの……こんなの♡♡♡♡♡♡♡♡)

互いに身体をガクガクと震えさせながら絶頂の余韻を味わっている。

白濁液はそのままロビンの太腿に流れていき、卑猥で濃い匂いが鼻から脳に伝達され、チンポ脳化が加速していった。

「んっ……んんっ♡」

バサッ!!!

互いに身体を支えきれなくなった二人は、男を下にしてベットに倒れ込んでしまう。

「はあ……はあ……はあ……はあ♡♡」

ロビンは息を整えながら、ゆっくりと状態を起こして、男の股間の上に跨った。

その瞳には既に、♡マークがくっきりと浮かんでいるように男には見えた。

「はあ！ はあ♡ あああ♡ んんっ♡」

ロビンは男の股間に跨って、黒いショーツの上から自身の秘部を肉棒に擦り付けて腰を振っていた。

ざらついているショーツの生地が男の精液とカウパーの潤滑油でいい感じの刺激を肉棒に加えていき、射精直後にも関わらず、あっという間に肥大化する。

「んっ……くっ！」

男は自分より身長が高く身体もむっちりしてて大きいロビンの重さを股間から感じ取り、ずっしりした女体の重さが心地よかった。

男は自分の一心不乱に腰を振り続けるロビンの両手をそっと握って恋人繋ぎをして女体を支える。

「ふう！！ んっ♡ はあっ！」

ロビンは男に繋がれた手から快感と思えるほどの温もりを感じ、無意識の内に強く握り返しながら、股間を擦り付け続ける。

(手を繋いだけで……もっと股間が熱くなって……♡ でもダメ！ 仲間のためにもこの男にいいようにされては……)

ロビンは歯を食いしばりながら快楽に抗いつつ、何とか男に反発しようとした。

「くっ……悪魔の実の能力を使わないと女も抱けないなんて……みじめな男ね……んっ♡ でも、私がこんな事であなたの言いなりになるとしたら大間違いよ。仲間のために……仕方なく……んっくっ♡ あなたと……寝るだけ」

ロビンの思いもよらなかった発言に驚いた男は息を飲んで黙ったが、しばらく考え込んだ後、繋いだ手をさらに強く握り返し自分の意見を口にした。

「では、こちらがあなたの言いなりになります！！！ 仲間の方たちのためにも、どうぞチンポを使ってください！！」

「っ！？」

(この男……いったいどういうつもり？ 私の身体が目当てでも……主導権を握るつもりではないというの？)

悪魔の実の副作用を利用し女を抱こうとしているぐらいの男だったので、ロビンはてっきり男が女を性を吐き出すための道具として見ているのかと思っていたが、どうやらそうではないらしいことに気づき始めた。

「今までロビンさんの手配書にずっと精子をブチまけてました！！！ ロビンさんは童貞卒業の憧れなんです！！ そんなロビンさんにチンチン使われるなら本望です！！」

「……っ♡ そんなことを言って！！ 結局あなたが私とセックスしたいだけじゃない！！ やはり下劣な男ね！！」

「はい！！ ロビンさんと！！ セックスしたいだけです！！ でも、セックスと言っても、ラブラブで甘々で、下品で厭らしいセックスがしたいです！！！！」

「んっ……♡ なんて男なの……」

男の告白を聞いて子宮が疼いてくるのを感じているロビンは、我慢できなくなったように腰の振り方が本気になってきていた。

長身であることを活かした体重の重さで肉棒を押しつぶしつつ、媚びる腰振りでショーツ越しに海綿体をクニクニと刺激していく。

肉棒の熱さがショーツ越しに膣口に伝わり、さらにその熱が膣内にまで敏感に感じ取られ、どんどん体内が熱くなってきていた。

愛液はもう既にどろどろに漏れ出ており、アラサー処女マンコのセックス準備は完了を告げている。

(所詮私とセックスしたいだけの下劣な男だけれど……身体の疼きを止めるにはこのチンポが必要不可欠……どうせなら……こちらが利用させてもらおうわ……♡)

そしてロビンは不敵な笑みを浮かべながら男を見つめる。

「いいわ、あなたとセックスしてあげる。利用させてもらおうわ……このチンポ♡」

その言葉を聞いた瞬間、男の愚息がびくびく反応して、その反応を股間で感じ取ったロビンが厭らしい笑みを浮かべる。

「ふう♡ ……ふう♡」

「あっ……」

男とセックスする決意を固めたロビンは息を整えながらゆっくりと腰を引き上げる。

すると地面からハナハナの実の能力による腕が二本生えてきて、片手は男の肉棒を掴み、片手はロビンのショーツをずらして秘部を露わにさせた。

自分と恋人繋ぎをしたままロビンが挿入する動作に移ったことに対して、愛おしさを感じた男は、握っているロビンの両手にさらに力を込めて絡ませる。

「んふっ♡」

(可愛い♡ 流石童貞ね♡ 案外この男で良かったかもしれないわ♡)

男が恋人繋ぎの手を強く絡めてきたことにロビンも愛おしさを感じて、強く握り返す。

部屋全体にむせかえるほどの匂いを漂わせている男の肉棒の臭気。

ショーツに染みて膣口を感じさせる我慢汁。

海綿体から感じる肉棒の硬さと熱さと太さ。

そして悪魔の実の強い副作用とチンチンの実の作用がニコ・ロビンの脳を性的に刺激、興奮させ、処女だというのに淫乱ドスケベ女へと変貌させる。

ロビンはハナハナの実の腕を器用に使い、クニクニと亀頭を膣口に当てがった。

男にとってはそれだけでも射精してしまいそうになるぐらいの快感だったが、歯を食いしばりながら必死に我慢し、挿入の時を待っていた。

「ふふっ♡♡ もう射精してしまいそうなのね。我慢なさい、射精すならしっかり膣内で射精してもらわな

いと♡」

「はい……頑張ります」

膣口が亀頭に当たっているだけで肉棒の状態が敏感に脳に感じられ、ロビンの興奮も高まった。

その脳の興奮状態が冷めないうちに挿入してしまおうと、ロビンは覚悟を決めてゆっくりと腰を落としていく。

ニユルッ……ニユルッ……

「んんっ……んんっ♡ ああっ♡」

膣口から少しずつ肉棒が入っていき、ロビンの膣内を満たしていく。

亀頭が入り込んで来ただけで今まで得たことのない快感を感じて、脳を痺れさせ、ロビンの口から艶声を膣内からは愛液が漏れ出てきた。

（なんて快感なの♡ 少し……入れただけで……もう……っ♡ これが……チンチンの実の能力……）

ゆっくりと肉棒を挿入しているだけなのにロビンは軽く絶頂してしまったので、改めてチンチンの実の恐ろしさに驚き、そして下腹部を熱くさせていく。

「んんっ……ふんっ♡ くふっ♡」

破瓜の痛みを考え少しずつ腰を下ろしていこうとした矢先、余りの快感と、愛液と我慢汁の潤滑油が肉棒を滑らせた。

ズチュ……ズチュ……ズリュ！

そして亀頭が子宮口にノックしたかと思えば、その瞬間、肉棒が膣内で爆発したように変化する。

「……っ！？」

ロビンの膣内をミチミチに満たすように肉棒が太くなり、さらには血管もバキバキに浮き上がった。

その変化が脳内に響いた瞬間、圧倒的な快楽がロビンに襲い掛かり、絶頂へと導いてしまう。

「~~~~っ♡♡♡♡♡♡♡♡ あああああああああああ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

男の手を握りしめ、腰を逸らせて天を仰ぎ、痙攣しつつ快感に身を委ねてしまった。

（なぜ！？ 処女喪失時は痛みが伴うはずなのに！？ まさか……悪魔の実の力で……っ♡♡）

ロビンの考える通り、チンチンの実の能力により処女膜喪失の破瓜の痛みは快感へと変わっており、チンポに依存させる第一歩を踏んでしまったのだ。

「あっ……くっ♡ ああっ♡♡ んっ♡」

「んっ！！ 大丈夫ですか？ ロビンさん」

身体全体を大きく震えさせながら激しく絶頂するロビンを見て、さすがに少し心配になった男が声を掛ける。

「んっ♡ んくっ……ええ……大丈夫よ……はあっ♡ 問題ないわ」

男に言葉を返しながらゆっくりと秘部を確認すると、確かにそこから血が流れており自分が初めてだということが確認できた。

(血が流れてる……やはり……喪失の痛みは快感に変わっているよね♡ 興味深いわ♡)

チンチンの実の能力で破瓜の痛みが快感に変わり、その強烈な快楽もあって男のチンポに興味がわいてきたロビンは、秘部を見ながら絶頂時の涎も気にせずには厭らしい笑みを浮かべていた。

その様子を見ていた男も股間を確認して、そこから血が出ていたことを知る。

「あっ! ? ロビンさん……初めてだったんですね……」

「そうよ♡ でも悪魔の実……いえ、あなたのチンポのおかげで痛みは感じなかったわ、ありがとう♡ お礼と言っては何だけど……本気のセックス……してあげる♡」

まるで数多の男の精を搾り取ってきたようなそぶりができるのは、チンチンの実と悪魔の実の副作用の効果が如実に脳に直撃しているからであろう。

(この男のチンポが……私の子宮をキュンキュンさせて……♡ 自分でもふしだらな行為だと分かっている……止められない♡)

身体の疼きが男の肉棒を求めており、淫乱化したロビンは射精した精子を子宮にたっぷり注いでもらうため、腰を激しく動かした。

パチュンッ!! パチュンッ!! パチュンッ!! パチュンッ!!

「んっ!! はあっ♡ はあっ♡ ああっ♡」

凄まじい勢いのケツ振りで、男の股間部にアタックをするロビン。

デカ尻のケツ肉が弾ける音が部屋に響き渡り、男の股間に勢いよく重さを乗せて叩きつけられてくるため、ベットがギシギシと壊れそうなくらい軋んでいる。

(なんてチンポなの!! 私の膣内をギチギチに詰まらせて、無理やりこじ開けてきて……浮き上がった血管が……膣肉をゴリゴリと……♡♡♡)

ロビンが脳内に直接敏感に膣内を感じ取っているように、男の肉棒はロビンの身体が快楽に直行できるように変化しており、膣内を満たしてギチギチにするくらいの太さと鋼鉄のような硬さで肉壁をこじ開け、さらにバキバキに浮き上がった血管が抽送するたびに膣内を挟まれるような鋭い刺激を感じさせていた。

男も射精しまいと我慢しているため、カウパーが漏れまくっており愛液と混ざり合って激しい粘膜音も耳に届き、互いの脳の快感を加速させていく。

パチュンッ! パチュンッ! パチュンッ! パチュンッ!

細い括れの割に豊満な胸がピストンするたびに零れ落ちそうになっている。

互いに握ったままの両手で身体を支え合い、ロビンは全体重を男に預けているため、その重さが自分より身体の高い女が自分の陰茎で善がっている事実を突きつけてきて男の脳をより興奮させた。

「んっ!! くっ!! ふっ!! んっ♡♡♡」

(もう……射精そうなのね♡ 分かるわ♡ この男のチンポが……ドクドク脈打って……金玉から放り上げ

た精子を……私の膣内に……射精したくなってることが♡♡)

肉棒が膣内に侵入していることで結合している二人は、チンチンの実の能力によってお互いの絶頂さえも脳に伝わってきていた。

男にはロビンが絶頂しそうな瞬間と、より感じるポイント。

ロビンも同様に男が射精しそうな瞬間と、どんなプレイが好みなのか。

出会ったばかりでほとんど喋ってすらいなない二人だが、セックスして繋がった事によって図らずしも深く互いのことを知ってしまった。

「はあ！！ はあ！！ ロビンさん！！ こっちが射精するまで、イクの我慢してくれてるんですね！！ 一緒に絶頂するために！！」

「んっ♡♡ んあっ♡♡ あなたこそ……私の絶頂まで……んっ♡ 射精を我慢してるのね♡♡ いえ、ある程度……んっ♡ チンチンの実の能力で調整できるのかしら？」

「そんなことまでバレてるんですね……んっ！！ くっ！！ でも、ロビンさんのケツ振りが凄くて！！ もう限界です！！」

ある程度射精のタイミングを調整できる男でも、限界が来ていた。

というより、自分の身体の事がロビンにバレており、それにロビンが合わせてくれていることに、凄まじい幸福感を感じて射精を促していた。

男の射精が間近だということはロビンにも伝わり、ドロドロで熱々な精液を早く子宮に満たして欲しい思いが募り、腰を動かす力も強くなってくる。

(彼のチンポが子宮を貫くたびに脳が痺れて！！ もう私も……イキそう！！！！)

射精間近チンポはさらに血管をバキバキにして膣内の肉壁刺激し、ロビンの身体を悶えさせた。

ロビンは蟹股で勢いよく尻を打ち付けながらも、肉棒の気持ち良さに時折腰をくねらせつつ快感で震えている。

処女喪失もままならない内に極太チンポに膣内をこねくり回され、さすがの悪魔の子も大きな絶頂を我慢できなくなった。

「はあ♡ はあ♡ いいわ！！ 膣内射精を許可してあげる！！」

そう言うとロビンは男に体重を掛けるように上半身を落として、繋がっている両手で自分の身体を支えつつ、男の顔に自身の顔を近づけていく。

その体勢になった事で、ケツ振りがさらに激しくなり、男の肉棒に強烈な刺激が増していく。

「ふふっ♡♡ 気持ち良さそうな顔♡♡ いいわよ、私の本気のケツ振りで……たっぷり膣内に射精しなさい♡♡」

蕩けた表情で瞳に♡マークを浮かべたロビンに見つめられてそう告げられてた男は、情けない表情を晒しつつ我慢の限界だった肉棒から白濁液を噴出する。

(来るっ！！ 射精すのね♡ 私の膣内に♡ 子宮に♡ イクっ……イクッ……イクッ！！！！！！！！！！)

ドッピュウウウウ!!! ドピュッ!! ドピュッ!! ビュルッ!! ビュルルルルッ!! ビュルッ!! ビュルッ!!

そして、期待に胸を膨らませたロビンの膣内に、たっぷりの精子が放たれ、二人は手を繋いだまま同時に絶頂した。

「あっ……あゝ あゝ あゝ ああああああああ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

ブビュルッ!! ブビュウッ! ブビュルッ!!!

膣内から下品なマン屁を出しながら入りきらなかった精子が溢れ出てくる。

ロビンは腰を逸らせ、顔も反らせながら、目と口をくっぴらいたアへ顔で盛大に膣内射精絶頂を感じていた。

その絶頂は膣内から男にも伝わっており、男の胸を熱くさせた。

チンチンの実の能力と悪魔の実の副作用のせいとは言っても、自分のチンポで手配書の顔に何度も射精した女の身体を満足させたのだから熱くならないわけがない。

「ああっ♡ はっ♡ ああっ♡ ん……んんっ♡♡」

ロビンは絶頂の余韻を感じながら涎が垂れていることなど気にせず、口を閉じ、笑みを浮かべていった。

(なんという気持ち良さなの……これが……セックス♡ いいえ、ただのセックスでは決してここまでの幸福感は得られないはず……やはり……この男のチンポが……)

そして二人はゆっくりと握っている手の力を強めながら、互いの絶頂の余韻を感じつつ目を合わせて見つめ合った。

「んふっ♡ 随分いっぱい射精してくれたわね?」

ロビンは腰をくねらせて膣内で肉棒を感じつつ男にそう告げた。

「はあ……はあ……ロビンさんを満足させるために……張り切りました……」

「あらそう……でも……まだ満足したとは言い難いのだけれど……っ♡♡」

ロビンがそう告げた瞬間、その問いに応えるように肉棒が大きく脈打ち膣内でまた肥大化したのを感じた。

「まだまだイケそうね♡♡」

「ロビンさんが満足するまで、やらせていただきます」